

第37回日本民族学会特別シンポジウム  
「京都と文化人類学  
日本唯一の文化人類学科の挑戦と未来」  
開催日：2003年5月23日 於：京都私学会館

石毛直道・米山俊直・田中真砂子・鷗飼正樹・日野舜也

日野舜也：

司会をやらせていただきます、京都文教大学の人間学研究所長の日野と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。

今回こういうシンポジウムを企画いたしましたのは、実は明日と明後日、この土日ですけれども、第37回日本民族学会という学会が、これは全国的な文化人類学や民族学の研究者達の全国的な学会なのですが、その37回の大会を私たちの京都文教大学、非常にちっちゃな大学なのですが、引き受けることになりまして、そしてなんとか、うちの大学ができた意義とかそういうことを考えてみようということで、企画いたしました。

ご承知の方はご承知と思いますが、実は日本中できちんとした文化人類学科というような形の独立した学科を持っているのは、実は私の大学が初めてなんです。アメリカでは当たり前にあるんですけど。日本では今まで文化人類学科という形で作られたところはなかったわけですね。まあ京都文教大学というのは、よく言えばユニークな、悪く言えば変な大学で、人間学部ただひとつで臨床心理学科と文化人類学科、ふたつの学科だけという。どちらも実は日本で初めて、しかもそれが組み合わさった、人間学部というような大学を作ったわけです。それで、そういうユニークな共同研究ができないかということで、この人間学研究所というのを立ち上げたわけです。で、今回はこの学会を記念しまして、日本で唯一の文化人類学科が京都にある

という、そういうことについて、京都の文化人類学、民族学的な研究の伝統とかそういうことの関わりにおいて、今日は少し考えてみようということになりました。

で、今回お願いしましたお一人が、この3月まで国立民族学博物館の館長でした石毛直道さん。皆さんは食文化の研究で、たくさんの文化人類学とかいろいろな本でお耳に、お目に馴染んでいると思うんですけども、民博というのが関西にあるというようなことと京都との関わりで少しお話いただく。それから米山俊直先生は京都大学の名誉教授ということで、ずっと京都で都市研究とか、もっと大きく言えば比較文明というようなことで、そのあと大手前大学の学長として今、活躍されているのですけれども。やっぱり京都というところがかつて出しました『季刊人類学』という雑誌のいろいろなことを中心にして、京都の伝統みたいなことを話していただくと。それから田中真砂子さんは昨年、一昨年まで私たちの京都文教大学の大学院の文化人類学研究科の研究科長をされておられて、この大学ができたあとで、どういうことがいろいろあったのかということをお話していただくと。鷗飼さんは、皆さん名前を知っている方が多いと思うんですけども、ずっと社会学の方で都市の観察とか、そういうことでたくさんの仕事をされている方なんですけど、受付のところにあったと思いますが、私たちの人間学研究所の文化人類学と臨床心理学の共同研究のひとつのプロジェクトとして数年前までやっ

てました「京都論—その多文化的側面」という共同研究の成果がああいう形（鶴飼正樹・高石浩一・西川祐子編『京都フィールドワークのススメ』昭和堂、2003）でまとまりました。この本の実際のいろいろな編集の中心になられた鶴飼さんに、我々文化人類学、あるいは文化人類学を含めた私のような大学が京都を考えるとしたら、どんなことが一体説けるんだろうとか、そういうお話。と、いうことで今日はこの4人の方々にそれぞれに25分か30分しゃべっていただいて、最後にできるだけ皆さん、フロアとのディスカッションと言いますか、あるいは質問の時間を取ればと思っています。今の私の心積もりでは、8時半から8時45分ぐらいに終われるようにというようなことを考えております。どうぞよろしくお願い致します。では、最初に前国立民族学博物館館長の石毛直道さんにお話をお願い致します。どうぞよろしくお願い致します。

#### 石毛直道：

皆さんこんばんは。なぜ国立民族学博物館が関西にあるのか、ということについて話せといわれたのですが、実はそういった話にはなりません。国立民族学博物館（以下省略して民博といいます）、民博は別に関西の研究者が創ったわけではございません。これは日本民族学会が中心になって創設したものです。

東京大学の教授をしていた泉靖一さん（これから全部「さん」づけでいいます）、それから京都大学の人文科学研究所教授だった梅棹忠夫さん、その二人が中心人物になって、日本民族学会が民族学の博物館の設立を考えてきたわけですが、泉さんが急逝されたので、梅棹さんが民博を実現させる役割をになったわけです。そういったいきさつでできた組織ですから、最初から全国区です。特定の京都の大学の人脈とか、そういったものが中心になったりしたものではないのです。また、関西に造らなくてはならないという必然性も持っていませんでした。

最初は、東京周辺に創ることも考えて、関東で土地探しをしたこともありました。ちょうど

1970年の日本万国博覧会が終わって、万国博跡地懇談会というのができて、跡地利用を検討することになった。ということがあって、万博の跡地に民博ができたわけです。それですから、初めから関西に民博を創ろうという意図を持って計画したものではなかったわけです。しかしながら万国博と民博はあるつながりをもっています。そこで、「万博から民博へ」ということを、まずお話しいたしましょう。

1970年に日本万国博が大阪府吹田市を会場にして開催されました。その2年前に、万博のテーマ館の展示プランの検討がなされていた。そのテーマ館のプロデューサーが美術家の岡本太郎さんで、サブプロデューサーがSF作家の小松左京さんでした。そして、岡本太郎さんの太陽の塔があるテーマ館の地下空間を「人類の過去・根源の空間」というテーマで演出し、そこには世界のいろんな民族の仮面と神像を展示しようということになったわけです。

岡本さんは、パリ大学の民族学科を出た人です。岡本さんがフランスで勉強してたころ、1937年、パリのトロカデロで万国博覧会が開かれました。その万博が終わったら、その跡地に博物館群が建てられた。そこにミュゼ・ド・ロム（人類博物館）という民族学の博物館が創られた。そのようなことを岡本さんはよく承知していたわけです。

1968年の夏に、京都と東京で国際人類学民族学会議という4年に一回あるオリンピックみたいな自然人類学、民族学、文化人類学の国際学会が開催されました。2年あとの万博のテーマ館に、仮面と神像を展示するとなると、展示資料の収集をしなければならない。世界各地の資料を集めるにあたっては、国際人類学民族学会議に出席した各国の著名な民族学者たちに応援を頼もうということになり、東京で会合が開かれました。

その会合の日本側の出席者としては、泉さん、梅棹さん、もちろん岡本さん、その他に当時の若手の文化人類学者として、川田順造さん、原忠彦・原ひろ子夫妻、青木保さん、それからわたたくしが参加いたしました。その会で、

岡本太郎さんが世界の著名な民族学者を前にフランス語で大熱弁の演説をしたわけです。その時に、岡本さんはこういったことを話しました。「この来るべき日本で開かれる万国博を機会に、日本に民族学の博物館をつくりたいんだ。それで今回、収集しようとする仮面と神像は将来の民族学博物館の貴重なコレクションとなるだろう。だから皆さん協力してくれ」、といったわけです。

ということで、日本万国博世界民族資料収集団というのが結成されました。若手の文化人類学者たちがメンバーとなって、世界各地に散らばって、仮面と神像を集める仕事をしたわけです。その主要なメンバーとしては、岡田宏明さん、大貫良夫さん、川田順造さん、高山龍三さん、青木保さん、後に民博のスタッフとなった人びとでは、友枝啓泰さん、野村雅一さん、江口一久さん、松原正毅さん、それにわたくしといったところです。そういった人々が手分けをして世界に収集に出かけた。現地で収集にたずさわる人びととの連絡をとり、収集物が港に着いたら、倉庫に運んで整理したりする収集団の関西での事務局長役をしたのが、現在民博にいる吉田集而さんでした。そして、約2,600点の仮面と神像を世界各地から集め、主要な標本をテーマ館で展示したのです。

それらの資料は、その後、民博に移管されて、民博開館時の展示を構成する貴重なコレクションとして活用されました。民博の展示に使用しなかった資料は、ながい間、日本万国博記念協会に保管されていたのですが、わたくしが民博の館長をしている間に、協会の上承を得て、すべてを民博にゆずってもらいました。

さてこれから京都の文化人類学の特徴と、その歴史のようなこととお話いたします。この京都の文化人類学の特徴は、徹底したフィールドワークをする。フィールドワークを大変重視するということです。それから文化人類学出身の研究者じゃなくて、さまざまな分野の学問の出身者が文化人類学をやったということにあります。

この京都文教大学ができるまで、関西に文化

人類学の講座はありませんでした。そこで京都出身の文化人類学者たちは、いろんな学部出身者です。たとえば農学部の出身者を挙げたら、亡くなった今西錦司さん、日本民族学会の会長をなさった飯島茂さん、ここにおられる米山俊直さん、いま京大の教授をしている福井勝義さん、民博の教授をしている山本紀夫さんなどがいます。理学部の生物学からは、梅棹忠夫さん、精神人類学を提唱した故藤岡喜愛さん、民博から総合地球環境学研究所に移られた秋道智彌さんがいます。文学部の考古学出でいえば民博の松原正毅とわたくし。地理学では、これも日本民族学会の会長をしました岩田慶治さん、川喜田二郎さん、石川栄吉さん、それから民博関係者としては前館長の佐々木高明さん、田辺繁治さん、端信行さん、小長谷有紀さん、言語学の分野では民博の故和田祐一と江口一久さんがいる。…といった具合に、京都の文化人類学研究者はいろんな分野の出身者たちから構成されています。

文化人類学を教える講座というものが無かったわけですから、みな文化人類学以外のディシプリンをマスターしてから文化人類学に立ち向かった。ですから学問の幅が大変広いわけです。いろんな分野の出身者たちが文化人類学という共通項を媒介にして集まったわけです。それで文化人類学を勉強するための、さまざまな研究会ができましたが、おなじ研究室の先輩後輩という縦の関係は、京都の文化人類学・民族学にはありませんでした。別の分野の出身者が研究会をつくって集まるということなので、上下関係ではなくて横の関係です。そして、ちがった分野の出身者たちが、ワイワイと情報を交換するという、サロンのような雰囲気がつよい学風ができたわけです。

民博にも総合研究大学院大学という大学院が設けられています。それは修士課程卒業者が受験して入学するドクターコースだけの大学院です。総合研究大学院大学は大学共同研究利用機関を母体として設立された大学院です。大学共同研究機関とは、日本における高等学術研究所群のようなもので、高エネルギー加速器研究機

構、国立天文台、歴史民俗博物館、国文学研究資料館など、さまざまな国立の研究機関がつくっている組織です（独立行政法人化によって、現在では別の組織に再編成された）。

2-3年前から、総合研究大学院大学のなかで、博士課程だけの大学院でいいのかという議論がなされています。自然科学系の研究所ですと、大学院の学生は実験の助手として都合がいい存在なので、修士の時代から学生を採用して実験に慣れてもらうと、戦力として大変役立つ。また、自然科学系では、たくさんの大学に博士課程の大学院があるので、出身校の博士課程に進学する者がおおく、総合研究大学院大学に学生が集まらない、ときには定員割れをする。そこで、学部卒業の学生から捕まえておいて、修士、博士、それを一貫した教育をしようという目論見があって、自然科学系の学科では、修士課程から学生を採用すべきだという。

しかしながら民博を中心とする人文系の研究機関は、それに一貫して反対をしております。人間の現象を研究する人文系の学問は、きわめて幅広い領域を研究対象としています。若いときには、せまい専攻分野にこり固まらずに、さまざまなディシプリンを身につけ、社会や文化を総合的にとらえる基礎をつくっておくことがたいせつだと考えるからです。

民族学ないしは文化人類学という学問は実に間口が広い領域です。間口は広いけど、他の学問にはない文化人類学の独自の的方法論というものはそれほどない。社会人類学における親族理論など、いくつかの人類学的方法論はありますが。現代の文化人類学は、古典的な文化人類学よりもっとずっと広い現代的なさまざまな問題をあつかっています。そうすると、既成の理論だけでは解けないようなことがたくさんある。もちろん文化相対論のような文化人類学的なものの見方というのは、たいへん大事なことです。しかしながら、それは、それほど長い時間を必要としなくても学ぶことができる。

京都には文化人類学を教えるところがなかったということで、みんな独学でやってきた。独学でも文化人類学はある程度できるわけです。

そこで、他の学問をマスターしてから博士課程で勉強しても、文化人類学は間にあうのではないか。別のディシプリンで学んだ武器をもって、文化人類学を学んだらいいんじゃないかということで、民博ではやっぱり学生はドクターコースから取ろうということになっております。

この京都文教大に初めての文化人類学の学科が出来たというのは、これはたいへん素晴らしいことです。しかし、また、京都文教大で学ぶ方々は文化人類学だけじゃなくて、他の学問にも興味をもち、文化人類学ともうひとつの分野も勉強しておく、研究者となったとき強みとなる。文化人類学だけの純粋培養ではなく、広い学問を心がけていただいたらいいんじゃないかと思います。

さて、いろんな研究会があったと言いました。そのひとつに青年人類学会というのが、1950年代の終わりから60年代にありました。これは日本民族学会の京都支部の研究会でした。そこにはさきほど申し上げた人類学者たちで、わたくしよりも年上の人びとで京都在住、あるいは京都周辺に住んでいた方がたが参加していました。文化人類学者のほかには他の学問を専門としているけれども、文化人類学にも興味があるという人たちが常連でした。たとえば考古学では榎原考古学研究所の所長をなさっている樋口隆康さんとか、民俗学では、当時同志社大学の教授であった平山敏治郎さんが参加されました。米山俊直さんや飯島茂さんは当時大学の助手でした。わたくしは学生だったのですが、樋口さんに連れられて、オブザーバーとして青年人類学会の例会に出席し、傍聴していた。そのうち皆さん歳をとって、青年というのがおこがましいということになって、後に人類学談話会という名前に変えます。その頃、京都大学では文学部の社会学で棚瀬襄爾さんなどが文化人類学を講じられていましたが、社会学系の文化人類学は文献中心の学風がつよかった。それにたいして青年人類学会の主流はフィールドワークを重視しておりました。

探検大学と京都大学がいわれたりしたことが

あります。探検大学の伝統をたどりますと、1939年に設立された探検地理学会にいきつきます。その会長は当時の京大総長で中央アジアの研究をしていた東洋史学者の羽田亨さんでした。のちに中央アジアや西アジアの発掘をする考古学者の水野清一さんや今西錦司さんが会員として名前を連ねていました。1941年には、探検地理学会によるミクロネシアのポナペ島の調査がおこなわれます。隊長が今西さんで、川喜田二郎さん、梅棹忠夫さん、中尾佐助さんが学生の頃ですが隊員として参加しています。1942年には、やはり今西隊長による大興安嶺探検隊が組織され、川喜田さん、梅棹さんが参加しました。

今西さんは、戦争中に中国の張家口に設立された西北研究所の所長になりました。副所長は石田英一郎さんです。東洋史学者の藤枝晃さん、栽培植物を研究した中尾佐助さん、梅棹忠夫さんたちが西北研究所の研究員でした。戦争が終わりますと、西北科学研究所のメンバーたちが中心になって、自然史学会が誕生します。自然史学会は『自然と文化』という雑誌を刊行し、大陸での調査報告の論文などが掲載されましたが、そのマネージャー役をしていたのが藤枝晃さんで、藤枝さんは同時に日本民族学会関西支部の事務をやっていたのです。そういったことで、東洋史と大陸研究、民族学がオーバーラップしていたわけです。自然史学会のメンバーたちが中心になって、戦後のさまざまな探検が企画されます。カラコルム・ヒンズークシュ学術探検隊というのができますが、それに今西さん、梅棹さん、中尾さんらが参加します。その探検隊が刺激になって、学生のクラブとしての探検部というクラブがつくられます。その探検部の部員から、文化人類学者が何人も出ております。

1960年代になりますと、今西さんをヘッドにしたアフリカの類人猿調査がはじまります。それにはチンパンジーやゴリラの研究をする類人猿班のほかに人類班というのができ、アフリカの民族を現地調査したわけです。類人猿班を代表するのが伊谷純一郎さんだとしたら、人類班

を代表するのが、当時北海道大学にいた富川盛道さんで、富川さんの教え子の日野舜也さん、のちに民博のスタッフとなる和田正平さんたちがアフリカでのフィールドワークに参加いたします。このアフリカでの文化人類学のフィールド調査には、さきほどから出てきている名前では梅棹さん、藤岡さん、それから亡くなった和崎洋一さん、端信行さん、福井勝義さん、田中二郎さん、江口一久さん、米山さんとわたくしなども参加しています。

そして、京都大学アフリカ研究会という学生を主体とした研究会が出来ます。そこからまた文化人類学の素養を持った人びとが出てくるわけです。理学部に自然人類学研究室が設立され、ここが霊長類研究の中心になりました。いっぽう、京都大学人文科学研究所に社会人類学研究部門というのができまして、その初代の教授が今西錦司さんです。その次を梅棹忠夫さんが引継ぎ、それから谷泰さんが引継ぐといった系譜があります。アフリカ研究を通じて京都の人類学というのは類人猿、霊長類の研究と人間の研究が密接な関係をもっていた。そこで、文化人類学者の卵たちは、霊長類研究の若手の連中といつも一緒に議論してたりなんかしてたわけです。

さて、アフリカ研究の他にもうひとつの地域研究の拠点として東南アジア研究センターがある。そこでも、若手の人類学者たちが活躍します。

さて人文科学研究所の社会人類学の研究会では、週1回、所属大学の別をこえて研究者たちが集まり、共同研究をやっていました。さまざまな分野出身の人びとが社会人類学の共同研究会のメンバーとなって、熱心にディスカッションをしたわけです。これが、民博の共同研究にも受け継がれております。もうひとつ、京都大学人類学研究会、通称「近衛ロンド」というのがありますが、これについては米山さんがお話になるはずですので省略いたします。

このような徹底したフィールドを重視する京都の民族学の学風は、民博にも受け継がれております。民博のスタッフは研究だけしてたらいい

い研究貴族だと思われがちですが、民博はそんな楽なところはありません。さきほど申しあげたように大学院生の指導もしなくてはならない。大学の研究者にはない博物館の展示をおこない、市民講座を開くなどの博物館活動もやっている。限られた人数で、さまざまな役割分担をして、研究者たちはいくつもの仕事をかかえています。それでも、民博では長期のフィールドワークを研究者たちに奨励する。長期のフィールドワークに出かけたら、誰かに、その人がいない間の仕事の負担がかかってくる。それでも、文句をいわない、足の引っ張り合いはしないという、フィールドワークを重視する雰囲気は民博にはあります。

民博は学閥にとらわれることなく、京都だけではなく、全国から研究者たちを集めました。これからも、全国の大学との交流をはかり、名実とも大学共同利用機関としての役割を果たしていくことと思います。ご清聴ありがとうございました。

**日野：**

ありがとうございました。ご質問とかあると思いますが、それは最後の方にまとめるということで、引き続き大手前大学学長の米山俊直さんをお願い致します。どうぞよろしくお願ひします。

**米山俊直：**

こんばんは、米山です。石毛さんの後をどういふふうにお話すればいいかということですが、この『季刊人類学』という雑誌がありまして、20年続いていたんですが、それのですね、全部のバックナンバーというか、総目次をですね、お手元にお届けしております。これはもう研究者になる、あるいは研究者の皆さんの場合でしたら、参考になるかと思ひまして、お土産にと思ってコピーをしてきたんですけれども。『季刊人類学』といいますのはちょうど1989年に終わったんですけれども、20年間続いた雑誌です。それで最初の方は、社会思想社という本屋から出版されておりました、それが4巻4号

の段階になって講談社に移ったわけです。そこからずっと5巻以降はですね、講談社が出版元になって、まあ年に4回ですけれども出版されておりました。一番最後の号が20巻4号1989年、これなんですけれども、これにはかなり細かい、一番最後まで目次がついておりますので確認して頂ければありがたいと思います。一番最後の20巻4号に付いてるものですから、20巻4号の説明がちょっと貧弱なので、それだけは頭にくっつけておきました。それからもうひとつの社会思想社から出ていた方の、一番最後の号にもですね、この4巻4号の目次が入ってませんので、それもここに付けておきました。ご覧になれますように、割に長くですね、続いていたんですけれども、この編集者はですね、最初から変わっておりません。編集委員というのはですね、50音順に読み上げますと、飯島茂、池田次郎、石毛直道、岩田慶治、梅棹忠夫、加藤秀俊、佐々木高明、谷泰、西川幸治、樋口隆康、藤岡善愛、松原正毅、米山俊直、和崎洋一、和田祐一、というメンバーです。これ松原正毅君だけが途中から参加したと思いますが、後は最初からの編集委員で、そのままずっと途中で交替というふうな話もあったんですけど、結局変わらないで続いてきた雑誌です。この中にはですね、一番最後の号で「休刊にあたって」というところで、大勢で座談会があつてですね、一種の総括をやっておりますので、もしご関心のある人はこの20巻4号の一番最後の議論を読んで頂ければ、どういういきさつでどういう格好で展開したかという話がわかって頂けるのではないかと思います。

先ほど石毛さんがたくさんのサークル・グループについて紹介頂きまして、最後に「近衛ロンド」、京都大学人類学研究会については私に残しておくからということで、それだけが残されたわけですが、実はこれはですね、一番最初の、ルーツのルーツというところから申しますと、非常にプライベートな、個人的な集会が始めたわけなんです。それはですね、梅棹忠夫さんが毎週1回、家を一種のオープンハウスにしまして、だれが来てもいいよってというような

ことで、夕方行ってですね、夜遅くまでお喋りをして帰るっていう、そういう日があったわけです。それがですね、ありまして、みんな色々な言い方をして、「梅棹サロン」とかですね、「サロン・ダントロポース (Saron d'anthropos)」なんてカッコいいことを言ってる人もいましたし、色々な言い方をしたんですけども、そこへ行けばただで酒が飲めるということがひとつありますし、色んな人に会えるっていうことがあったわけですね。それで特に、非常に珍しい人っていうか、珍しい出会いっていうふうなものがありました。例えばですね、一人は南極から帰って来て、一人はたまたま北極から帰って来たっていう、南極帰りと北極帰りがドッキングするっていうようなことがあったりしてですね。そういう風なことがあった集まりだったんです。それがですね、まあ何て言いますか、シード、種になったというふうに考えて頂いたらいいと思うんですが、そういうものがありまして、そのうちにですね、研究会をやるのではないかということになって。最初の頃はですね、私が記憶していますのでは、私はアメリカ行って帰ってきてですね、最初にそういう話を聞かされたのは、一番初めの時はですね、実は人類学ではなくて、プライマトロジー（霊長類学）の方の方たちで、東滋さん。東さんっていうのは霊長類研にいらした方ですが、それから吉場健二さん。吉場さんは、宮崎県の幸島で事故で亡くなられたんですが、その人達が研究会をやりたいんだけどもってという話がありまして、やりましようねっていうふうなことを言っていた記憶があるんです。しかしそれはなんとなく立ち消えになってしまって、ちょっと前後が正確じゃないんですが。そのうちにですね、実はここにいる石毛さんとか松原正毅さんとか、やって来てですね、やはり研究会をやりたいというふうなことになって。

最初はですね、場所がなかなか決まらなくて、なんか人文研の、百万遍の角のですね、何とかいうちょっとはつきり覚えていない、研究所の2階みたいな所の部屋を借りて、そこでやったような記憶があります。そのうちにです

ね、次第に場所が落ち着いてきまして、京都大学楽友会館、楽友会館っていうのは近衛通りにありまして、卒業生会館と言うべきでしょうかね、そういうものなんですが、楽友会っていうのがありまして、それが経営してて、普通はあまり学生はうろろできないような、ドレスアップした先達が色々しているというような場所だったものですから、敷居が高かったんですが、そこを借りて研究会を始めるということになりました。それが定着するのは、たぶん梅棹さんが今西先生の後を襲って、人文科学研究所に移られてからではないかと思います。それまではプライベートな梅棹サロンっていうのはあったんですけども、そういうふうな方で、システマティックな集まりではなかったと思います。しかし記録がけっこう残っておりまして、その辺のところから色々な話題をですね、順番に出していこうと、それを松原正毅君が、非常に根気良くですね「寄り合いの書きとめ」という名前のですね、記録をずっと作ってくれたんです。寄り合いの書きとめという名前はですね、実は「APE (エイプ)」っていう、anthropology、primatology、ethnologyですか、の、キャピタル、A・P・Eというのを取ったグループが東大の人類にあって、その時に確か坪井正五郎がその記録に「寄り合いの書きとめ」という言葉を使ってるっていうんで、その真似しようって言って、「寄り合いの書きとめ」にしたと思います。そういうことが始まりだったんです。

最初の頃は、色々な試みがありまして、きちっと勉強しようじゃないかっていうことで、要するに大学に講義がないんですから、講義がありませんから、お互いに講義をしましょうっていうようなことで、講義録のようなものをですね、作っていくようなこともいたしました。それから非常に熱心にですね、言語学あるいは言語の研究こそが、人類学をやるためには不可欠なことから、それをきちっと身に付けましょうというので。そちらの本格的な議論はですね、梅棄さんご自身もやりましたし、和田祐一が熱心に講義をして下さったりというふう

な、そのメモが、ノートが私のところにも結構たくさん残っております。それからそれ以外の色んなあれですが、そういうまあアカデミックなっていうか、勉強会のシリーズと併せてですね、同時に調査に行き帰って来ましてっていう人の報告会ですね。これがだんだんメインになっていくわけですね。そちらの方が回数が多くなってきて、最後はアカデミックな研究会の方は吹っ飛んでしまうというようなかたちになったわけですが、そういうふうな状況がありました。私自身はですね、3年京大の助手をしまして、それから甲南大学に移って5年間いたことになるんですが、たまたま京都から動いていけませんので、それは始めからずっと、助手時代からですね、付き合っていたわけですね。助手時代の前の大学院の時代はですね、先ほど、石毛さんも仰ってた青年人類学会というのがありまして。これにはですね、もう「ビールを飲む会なんだよ」っていうことで連れて行って頂いたんですけども、梅棹さん、川喜田さん、石川さんですね、石川栄吉さん、川喜田さんが1番中心的な機能を果たされていたと思いますが、西田龍雄さん、樋口隆康さんとかですね、そういう人達がレギュラーで顔を揃えてですね、これは楽友会館だったですね。楽友会館でビールを飲みながら話をするという、そういうのがありました。

その流れを引いたといえれば引いたわけですが、次第にですね、京都大学人類学研究会という名称がだんだん定着してきまして、その名前もどういふふうにしようっていうんで、これは和崎さんが提唱したんですが、「近衛ロンドがいいんじゃない」と。ロンドはエスペラント語で“サークル”という意味ですが、近衛っていうのは地名ですね。地名は国際とか世界とかかっていう、日本とかですね、京都とかなんとかこう、あんまり大きくしないでだんだん小さくして、近衛って一番小さい所にするのが1番いいんだっていうようなですね。これは確か梅棹さんの主張だったと思います。結局「近衛ロンド」っていうのがニックネームに落ち着いて、「京都大学人類学研究会・近衛ロンド」と

いうことで定着いたしました。それで甲南から京大に移りましてからは、人文科学研究所の社会人類学部門の谷泰さんとですね、それから私のところの、要するに文化人類学の教室ではないんですが、社会学教室なんですか、社会学教室の中の文化人類学を担当している私と、という形でもって、それが中心になって近衛ロンドは運営をしてきたわけです。

『季刊人類学』の編集の方もですね、その谷さんと私のところと、そこでお世話になっていた女性の方とが中心になって、色んなマネジメントをやって頂いていたわけですね。毎週水曜日の夜が近衛ロンドと、これは決まっていますね。もう毎回雨が降ってもなんでも、とにかくその日は楽友会館に行けば何かやっていると、そういうふうになりました。それで、幸いなことに文化人類学の講義が始まってからは、文化人類学の講義でなくて実習というのがありまして。実習は2コマなんですね。倍なんですね。ですから午後いっぱいという感じで、水曜日の午後はそれにあてて、その足で楽友会館にそのまま行ってしまおうという、そういう形を私は取っておりましたし、学生諸君もですね、結構同じ形で、そういう形で、つまり水曜日の午後から夜遅くまでですね、一緒にいたという、つるんでいたという、そういうところがないこともないわけなんです。

そういう感じで、近衛ロンドの方は運営されておりました、これはひと月4回としてその内の1回はオープンにしようという。それを日本民族学会の関西支部例会という、それやりなさいっていう本部の指示もありましたので、ということにしまして。それは葉書を出すし、新聞その他にもアナウンスを出すというようなかたちにして、しかるべきスピーカーを立ててですね、話をすると。あとの3回、あるいは4回の場合もありますけれども、は、もう少しインフォーマルな、内輪の研究会というようなかたちにしたわけです。まあ、色んな話題がありましたし、どんなことがあったかというのは、これも文教大学にも間違いなくこれはあると思いますから、これを見て頂いたら、後ろの方に



「タム・タム」っていうコーナがありまして。そこにですね、今どんなことを、近衛ロンドはこの3ヵ月はどんなことをやったってことがですね、記録として残っております。それを見て頂くと、ああこういうことをやっていたんだなと見当を付けて頂けるだろうと思います。

具体的な例をひとつだけ申し上げておきますと、タムタムっていうのは出版情報その他を中心にしたあれですので、それではなくて、もうひとつですね、「ロンド通信」というのがあって、それの方にそういう記録が、報告タイトルだけですけれど、報告されております。という形で、続けてきたわけなんですけれども。この一番最後の「休刊にあたって」っていう座談会がですね、出席者がですね、この時は石毛さんはどこかに行っていたんだと思いますが、飯島さん、池田次郎、岩田慶治、梅棹忠夫、谷泰、藤岡喜愛、松原正毅、和崎洋一、それに私、というので、私が司会をして、やっているんです。その中である意味で少し、この『季刊人類学』そのものの性格が変わってきたということの色々言っているんですが。

非常に大きな変化、最大の変化というべきでしょうか、それはですね、国立民族学博物館の発足そのものなんです。それによって梅棹忠夫さん自身が行きましたし、石毛君も行きましたし、かなりの人が京都から抜けてしまったわけですね。我々は残留孤児みたいなものだったんですが。どうしようっていうところがあったんですが。とにかくそんなことがひとつと、それから向こうがですね、民博の方が出版活動を積極的にやりますので、そちらの方にどうしても優れた論文が集まってしまうと。こちらになかなかいい論文が来ないというふうなことが、そういう欲求不満は、編集する者としては色々ありまして。穴が空きそうになって、急いで私が自分で論文書いて出したというようなこともあります。私の学位論文はそのおかげでできた、というところがあるんですけど。そういうところもあります。

それともうひとつ、この『季刊人類学』そのものの性質はですね、一番最初の頃はエンター

テインメントっていう側面があったと思うんです。例えば三川目四さんという人の投稿でですね、「縦横（タテヨコ）人類学」っていう、フィジカルアンソロジーに近いっていうのかな、でもないんですがね、もうフォークロアに近いんでしょうか。そういうふうな論文がありました。これがですね、外国人の間で日本人の女性のアソコはですね、横に、口の格好に、横になってるっていうそういうフォークテール、伝承があると。そういうことをめぐっての議論なんですね。そういうある意味でエンターテインメントっていうか、どう言ったらいいんでしょうかね、そういうことも取り挙げるっていうところもあったわけです。しかしだんだんそういう遊び半分じゃないかっていうふうにならまれそうなものはですね、淘汰されてきました。代わりに本格的な論文、学術研究論文が、登場するようになります。特にですね、池田次郎先生が仰ってましたけれども、自然人類学の教室の中で、向こうのサルの研究じゃない方のことをなんかやろうというようなこととですね。あるいはそういうふうなものとかですね、あるいはむしろ逆に、極めて、本当に専門的な形質人類学的なものですね。日本人の、古代日本人の人骨の比較研究のようなものとか。そういうような、徹底的にアカデミックなものがむしろこれに投稿されて、掲載されるというようなことが、相対的に多くなって参りました。だから、最初の頃は割合にリラックスした状態だったのですが、だんだん、何と言いますかね、威張り出しちゃってですね。あんまりにこう、お高く止まると言うかな。そういうふうな煙たい存在みたいなかたちにあるいはなっていたのかもしれないという気が多少しております。その部分はやっぱり反省しなければいけなかったのかもしれませんが。しかしおかげさまで講談社も喜んで15巻続けて、結局20年間続けて頂いて。ですが、いよいよもうこれはお手上げだからやめようということになって、休刊ということに。やめようっていうのはおかしいんですが、発展的解消で新しい本が出ればいいなっていうことで、この際、編集委員も一

切、青年人類学がみんな老人人類学になってるんだから、替わりましようってというようなこともひとつの理由だったと思います。

そんなことでですが、それ以外にですね、1枚、これ来る前に急いで作ってきましたことなんですけれども、私どもは言うまでもなくフィールド派といいますか、フィールドワークを中心にした文化人類学だというふうに考えているわけですけども。京都学派ってということで言いますと、その背景にはですね、やはりいわゆる哲学の、文学部の哲学科を中心とするですね、京都学派っていうのがあるわけですね。その流れを汲んでいないと言うと、ちょっと嘘になるみたいな感じがあります。ちょっと読みますと、普通京都学派っていうのは、これ戦前のことですが、西田幾多郎、田辺元、高坂正顕、正顕は正堯さんのお父さんです。鈴木成高、山内得立、この方は山内昶先生のお父さんです。それから九鬼周造、高山岩男、久松真一などの、京都帝国大学文学部を中心とする哲学者らの集団を指していたが、戦後になって人文科学研究所を中心とする共同研究、共同研究っていうのは、桑原武夫先生が言い出したっていか、始められたアイデアなんですけれども、それに一緒に進められたのが、貝塚茂樹、今西錦司らの系譜を指すようになったわけです。

文学部系の学者にも早くからですね、民族学ないし文化人類学に関心を持つ人々がいたことは間違いありません。考古学の水野清一、人類学の清野謙次の業績があると。それからここで一人落としておりました。これは先ほど石毛さんが触れられたので気が付いたんですが、棚瀬襄爾さんという、東南アジア研究センターを作った時に中心になった人ですが、棚瀬さんなども、『文化人類学』っていう本がございます。それから堀喜望さんの『文化人類学』、姫岡勤さんの『文化人類学』、それから横田健一・樋口隆康両氏の執筆された『人類学要論』、それからもう文教大をおやめになって、非常勤だそうですけども、高山龍三さんの、これ2冊あるんですね、『ヒト・文化・文明』という本と『環境・人間・文化』という本など

のようなテキストが出版されております。高山さんはフィールドワーカーですけども、横田さんも樋口さんも、フィールドワーカーと言うべきだと思いますが、どちらかというところライブラリーワークとして、それでもですね、堀さんの本などは非常に包括的に学説を追求されていて、非常に今読んでもですね、さすがというような感じがするところがある本ですね。

戦後、青年人類学会っていう集まりがあり、そこには岩田慶治、石川栄吉、西田龍雄らが参加。これにはあと、梅棹さんとか川喜田さんなども参加していたわけです。その中で特異なフィールド派として、戦中から戦後にかけて活躍したのが今西錦司である。それはまず梅棹忠夫、川喜田二郎、藤田和夫は、これは大阪市大の地質学の先生で、地震の時に大活躍なさった方ですね。吉良竜夫、この方は琵琶湖研究所の所長をなさった、大阪市大におられた植物学者ですが。6人ですね、いわゆるベンゼン核という人達がいる、その人達がむしろ今西さんをおつかいだかたちで色々活躍していたわけですね。それが一番ルーツになってるわけですが、その後ですね、大きく分けますと2つに分かれて、1つはプライマトロジーの分野におけるニホンザル研究、ゴリラ・チンパンジー・ボノボに至る、いわゆる伊谷純一郎、河合雅雄、川村俊蔵などの第一世代。それから、その伊谷さんや河合さんのお弟子さんたちにあたる、その教室がありますから、そのお弟子さんたちというようなかたちでの展開。もう1つはですね、人類学社会研究の展開。これは大興安嶺探検から、蒙古の西北研究所、まあ、ポナベ島探検なんかもありますが。その後、戦後は一時は失速しましたが、平野村の調査などもありまして、『村と人間』というすごくいい本もあります。

そういうものがあって、あと、富川盛道さん、北大のですね、富川、日野舜也、和田正平さんたちが参加して、福井勝義さんが加わったアフリカの現地調査ということが始まり、そこに和崎洋一、石毛直道、私などが続いたというかたちになるわけです。その後、今西を継いだ、梅棹を中心とする人文研の研究会を中心と

して、比較研究が続き、京都大学人類学研究会が始まり、やがて国立民族学博物館が誕生し、京都文教大学の文化人類学科の設立に至るといのが大まかなアウトラインということになると思います。

駆け足で前後不統一ですけれども、だいたい日本、京都の文化人類学っていうのはそういう経過を通して来たわけです。私は24年間京大で教鞭をとってきましたが、私は教養部ですから、9学部全部の学生に付き合いますので、その中から色んな人が出てきてですね、時々外国行くと、「先生の単位もらいました」「出てないでしょ」「出てません」という人、大使館なんかにもいるんですね。そういう人もいて、色々な所でお目にかかることもあるんですけども、私初めて文化人類学の講義を担当したのは、甲南大学なんです。初めて担当した時には、仲間に、梅棹さんあたりに「初めて文化人類学で飯が食える奴が出た」と言って、ひやかされた記憶があります。それから考えますと、もう非常に、40年近い時間が流れているわけです。そんなことで、ちょっとまた時間が長くなりました。これでおしまいにします。どうも失礼しました。

#### 日野：

米山さん、ありがとうございます。それでは引き続き田中さん、どうぞよろしく願います。

#### 田中真砂子：

田中でございます。今米山先生が、京都のグローリアスな伝統の最後のところに、京都文教大学の文化人類学科の設立を、つなげて下さいました。私に与えられたテーマは、京都文教大学人間学部に文化人類学科という日本で唯一、いまだに唯一なんですけれども、最初であり唯一の学科が、一体どういう経緯で出来たのか、そこでいったいどういうことをやろうとしているのかということをお話せよということでございました。この役には実は、私は適任とはいえません。というのは、私は最初からここに

わっていたわけではなく、設立2年後に文教大に参り、その後大学院の設立には関わりましたけれども、学部の方は形ができた後に入ってきただけだからです。今、3人の先生方のお話を聞きながら、ああ京都にはこういう大変輝かしい伝統があって、お名前を聞くだけでも、なんかもう人類学の学説史上の人物がきら星のように出てきて、私などは眩しい感じがするわけです。そういう土壌の上に、京都文教大学も建てられたということ、今更ながら思い知ったと思いますか、わかって、あらためて誇らしく思ったこととございます。

さて、京都文教大学に文化人類学科があるということは、ここにいらっしゃる皆さんはご存知でしょうが、実は一般にはあまり知られておりません。かつて文化人類学なるものがマスコミその他でけっこうめだっていた時期がございまして、日本の大学に文化人類学科がないなんてことを、お信じにならない方も多かったので。しかし日本の大学では新しい名前の、新しい専門内容の学科をつくることは至難の業であるという特殊事情があり、文化人類学者や学会の努力にもかかわらず文化人類学科は創設されませんでした。その困難な事業が成し遂げられたのが、たまたまこの京都であったというのは、米山先生がお話し下さったような京大を中心とする長い輝かしい歴史があったとしても、時代の偶然ということもあったのではないかと私は思います。京都という場所と、時代と、京大を中心とする人々の出会いの妙といってもよいかと考えます。

米山先生、石毛先生のお話は研究活動とか大学院生も含めて研究者のお話でしたけれども、私がこれからお話しさせていただくのは、学部における文化人類学教育についてでありますので、状況はまったく変わってまいります。まず京都文教大学が4年制大学を設置するにあたってなぜ文化人類学科だったのか、どうして前例もないのにこのような学科をたてることができたのか、いまだに私にも謎なのですが、以下のような事情があったらしいのです。

京都文教大学といたしますのは、知恩院系の

「学校法人家政学園（現：京都文教学園）」という法人に属しております。この家政学園が出来たのが1904年だそうでした、そうしますと、2004年ないしは2003年が100周年です。100周年を迎えるにあたって、何か大きなプロジェクトを組みたいということで、90周年を迎えた頃から、いろいろと計画が始まったようでございます。学園にはその時点ですでに幼稚園から短大までありましたので、その上にぜひとも4年制の大学をつくり、それが完成した暁には、さらに大学院までつくりたいということになりました。そこでどういう学部・学科かということになるわけですが、当時、学園理事長をしておりましたのが大橋秀一郎という方でした。なんとまあ京都は広いようで狭いというか、人の組み合わせの妙を感じてしまうのですけれども、この大橋理事長と国立民族学博物館の創設者であり初代の館長でいらした梅棹忠夫先生とKJ法の川喜田二郎先生、そして現在文化庁長官をしていらっしゃる河合隼雄先生が京都の中学で一緒だったとかいうことなんですよ。そんなことがあります、このお三方に学術顧問になっていただき、どういう大学をつくるか相談に乗っていただいたというわけです。その結果仏教的な人間教育ということで人間学部をつくらうじゃないか、学科としては人間を内側から研究する臨床心理学科と、社会とか文化とかとの関わりで外側から研究する文化人類学科でいいんじゃないか、とかいうことになったんだらうと思います。まあ顧問の先生方のお顔ぶれを思い浮かべれば、こういう組み合わせしかありえない、安易といえば安易な、でも深い必然性のある組み合わせであったといえましょう。そういうことで動き出してしまったのです。先ほどから石毛先生や米山先生のお話を伺いながら、なるほどこういう素晴らしい伝統があり、豊かな土壌があった京都というところだったからこそ、文化人類学科などというこれまで日本の大学になかったものもできたのだなあとなんて思っています。

しかしそれにしても新しい学科をたてるとなれば、文部省にも、また受験生となる高校生や

親御さんたち、高校の先生方にも文化人類学を学ぶ意義について納得していただかなければならない。ここからは臨床心理のことは脇に置きまして、文化人類学だけのお話をさせていただきます。文化人類学科を構想した頃、バブルの時期はもう過ぎようとしてはいましたが、外に向かって拡張しようという勢いはまだ残っていて、「異文化理解」とか「国際化」、「グローバル化」といった言葉が流行語となっていました。ところが1996年本大学が実際に動き出す頃になると、バブルははじけ、不況からの脱出もままならず、そうなると直接職業に結びつかない文化人類学なんてものを勉強して一体何になるんだという厳しい世間の目にもさらされることになりました。そんな中で、私たち教員も学部生が文化人類学を学ぶことの意味について改めていろいろ悩んでまいりました。結論などというものは簡単には出せませんが、文化人類学を学ぶことによって学生たちに身につけてほしいのは、エキゾチックな「異文化」を客体として、対象化して理解することなどではなく、私たち日本の社会にもあるさまざまな「文化」やそれを担う人々の違いを知り、そのことによって自文化を相対化し、互いにコミュニケーションできる感性と能力を身につけることではないかと、私たちは考えました。異文化理解というよりは人間理解なんだと言い換えてもいいかもしれません。

要するに他者をモノを見るように対象化して見るのではなく、相手に共感を持って理解する。言い換えれば異文化を単に知識としてではなく、なんて言うんでしょう、感情とかそういうことも含めて、自分とは異なる相手とどういう風に接するかという態度も含めて、理解できるということが大事なんだと思います。そういうことが出来た時にはじめて、たぶん学生たちは自分を相対化することも出来るでしょう。そして、その時はじめて主体としての自己を確認することができ、異文化間でのコミュニケーションやネゴシエーションが可能になるのではないかと趣旨です。

そういうふうにご考えますと、学部教育におけ

る文化人類学の目的は、特定の職業人を養成することではありません。医学部をであれば医者になれる、薬学部を出れば薬剤師になれるというふうに職業と直結しないという意味で、文化人類学は実学ではなく、「教養」教育であると思っています。教養ではあるんですけども、実生活に役に立たない教養ではありません。学んだことがそのまま役に立つ実学ではないけれど、ボーダーレス化し、複雑化する現代を生きる上で、これから生きていく若者たちがぜひとも身に付けておかなければならない教養であると、私たちは自信を持って主張できるとと思っています。

そういう経緯で京都文教大学人間学部文化人類学科は1996年に新設され、2000年に最初の卒業生を出しました。そして第一期生の卒業に合わせて、大学院の修士課程を設立し、2002年には修士の第一期生を出すことができました。

さてそれでは本学の文化人類学科でどういう試みを具体的にしているのかということ。「フィールドワーク」という科目を中心にお話したいと思います。文化人類学科のカリキュラムの中心と位置づけているフィールドワークについては、この後鶴飼先生がもっと詳しく、また違う角度からお話し下さる筈ですが。私たちはフィールドワーク（野外調査、実地調査）を、教員が学生に向かって一方的に講義をする講義科目としてではなく、実習科目として位置づけ、2年次、3年次、4年次にそれぞれ「フィールドワーク実習」「文化人類学演習」そして各自のテーマに沿った「卒業論文」を必修科目としておいています。教師から与えられる知識としてではなく、五感を全開して対象社会にとびこみ、そこから問題をたて、資料を集め、整理し、結果を口頭または文書で報告する力を身につけさせることが大事と考えるからですが、これらの科目を全部必修科目とすることには、実は大変な困難が伴います。というのは、一学年の定員120名、実数約150名の学生全員がかならずしも文化人類学に深い関心をもって入学してきたわけではないからです。異文化には興味があるから、漫然と講義を聞いている

ぶんには結構面白いけど、自分で汗をかいてまでやろうとは思わないとか、まあいろいろな学生がいます。それなのに必修にしてしまうと、全部の学生にフィールドワーク関連科目をとらせなければなりません。それでいろいろ考えまして、柔軟に対応することにしました。たとえば「フィールドワーク実習」を、いくつかのカテゴリーに分けました。すなわち①一応本格的にといいますか、短期間ではありますけれど初歩的なフィールドワークを実際にやらせるコースの他に、②ほとんど研修旅行のような形になるのですが、教員の側がスケジュールを立て比較的大勢の学生をひとまとめにして、見学するタイプの実習も用意致しました。また、文化人類学科にきたからにはどうしても外国の文化に接したいという学生もかなりいますので、毎年少なくともいくつかは③国外に行くプログラムも組み、これまでにアメリカ、カナダ、ゲーム、マレーシア、韓国、サモアなどに学生を連れて行きました。①の国内調査では、地元の宇治、京都をはじめ、和歌山、富山、遠いところでは北海道、沖縄まで、さまざまなテーマをたてて実習を組んでいます。これらは1年間で完結する場合がありますが、2年、3年、4年と同一場所や同一テーマで継続する場合があります。

このようなフィールドワーク関連の実習で一体何を目標しているのか、そしてその目標に向けて具体的にどのようなスケジュールで授業を進めるのかが次の問題です。簡単に説明しますと、設定されたテーマの枠内で各自分担を決める、または自分のテーマを立てるという作業から始まり、それぞれ文献資料を集めクラスで報告をします。その報告に基づいて全員で議論をし、各人現地で何を調べてくるのか、さらに焦点を絞り込む。そのような準備をした上で、現地調査に出かけます。現地では五感の全部を動員して参与観察を行います。短期間ではあります、学生たちはこうしたトータル・イマージョンからショックやら疑問やら違和感やら実にさまざまなことを感ずるようですが、私は若い彼らの感動する力にいつも感激してしまいま

す。フィールドから帰ってからの大仕事は、彼らが現地で感じた強烈な、しかし整理できないままの思いや観察を言語化する作業です。まず現地で得た資料や印象などをとりあえず整理してレジュメを作り、口頭で発表させ、議論をします。クラスの前で発表し、他人の発表を聞き、議論をする過程で、現地から持ち帰った簡単には表現できない感動や思いも少しずつ整理され、言語化されていくようです。そしていよいよ最後の報告書作りが始まります。全員これと定めたテーマのレポート作成にかかり、中間報告をし、また皆で議論をする。そういうことを何度かくり返して、各人のレポートが完成します。ゼミはこの頃には編集会議に早変わりして、報告集の体裁、論文の掲載順を決め、必要な写真や図表の準備など皆で議論しながら編集作業を進めてゆきます。実習、報告書の作成はこのように共同作業の部分が多い分、学生たちは達成感や感動を共有し、それだけ仲間意識も強くなるように思います。

フィールドワークというこのような方法は、文化人類学の基礎的素養であるわけですが、私たちは本学を卒業する学生のほとんどが文化人類学の研究者になるのではないことは承知しています。でも、どんな職業に就くのであれ、このような方法や手順を身につけておくことは、とりわけグローバル化するこれからの世の中で生きていくために必須な教養であろうと私たちは考えています。たとえ専業主婦になるのであっても、ボランティア活動をするのであっても、フィールドワークという方法は有用な技術なのではないでしょうか。そして、私たち教師にとっては、フィールドワーク実習の過程で学生達が生き生きと輝き、たくましく成長していくのを実感することができるのは、講義科目の授業をするだけでは味わえない醍醐味と私は感じました。多くの学生達にとってもフィールドワークはしばしば最高に印象深く、苦労も多い分やりがいもあったと思うようです。大学生活を通して一番大事なものとして残るのが、フィールドワークの仲間たちとの思い出であり、実習報告書や卒業論文であるというのがお

おかたの学生達の反応ですので、フィールドワークを中心に据えた文化人類学科の試みは一応成功しているといえるのではないかと思います。

フィールドワークを中心としたこのような教育は、当然、研究者を育てるための教育とは変わってくるはずですが。私たちが試みている教養としての文化人類学教育は、しかし、これから21世紀を生きる人達に極めて有用な、というより欠かすことのできない教養であると、私たちは信じて、毎日の教育をおります。ということで私の報告とさせていただきます。あとは鶴飼さんが、違った角度からフィールドワークについてお話下さると思います。

**日野：**

はい、ありがとうございます。それでは引き続きまして、鶴飼さんどうぞよろしくお願ひします。

**鶴飼正樹：**

鶴飼です。私の前に3人のご立派な大先輩が話されて、未熟者の私がいちばん最後に話さなければならぬということで、プレッシャーを感じています。起・承・転、石毛先生と米山先生の京都の話があって、田中先生の京都文教大学の話があって、私が結になるわけなんですけれども、はたして私にそんなことができるのかなあと、不安をいだきつつも、お話しさせていただきます。

私にとって京都は、文化人類学に出会った町です。私が京都大学文学部に入学したのが1977年。今から25年以上前になります。1回生で受けた文化人類学の講義の先生が、米山先生でした。教養部でいちばん大きな教室でした。すごくダンディな先生で、今でももちろんダンディなんですけれども、いちばん印象に残っているのは、夏の暑い頃、長袖のカッターシャツを腕まくりして講義されている米山先生の腕の太さです。ああ、いかにもアフリカで人類学をやった先生なんだなあ。すごくそれが印象に残っています。もちろん、授業の中身も印

象に残ってはいるのですが……。

教養部では、「米山先生の文化人類学は楽勝だ」ともっぱらの噂でした。だから、履修登録者は非常に多く、毎年3000人ぐらいいたんじゃありませんか。文系、理系、全学部に通じる講義でしたから。もちろん、全員が出席したら、教養部でいちばん大きい教室でもあふれるはずなんですけど、1年間続けて出席する学生は20人くらいしかいませんでした。私はそのうちの1人でした。試験は「人間にとって文化とは何か」という問題しか、毎年出ない。答えは何を書いてもええ。カレーライスの作り方について書いても通るといわれていました。

ところが、私が講義を受けた年は問題が変わっていて、「大きな常識について文化人類学的に述べよ」という問題と「父親の厳しい愛情について文化人類学的に述べよ」という問題のどちらかを選択して答えるというものでした。試験問題までよく覚えています。というのも、私が大学に入学した1977年には、京大で竹本処分問題というのがありまして、経済学部の助手だった竹本信弘という人が分限免職されることになり、それに反対する闘争が起きていたのです。京大の学生運動の最後の時代で、時計台には「竹本処分粉砕」という大きな文字が白いペンキで書かれていました。その竹本処分問題についての総長の声明の中に、「大きな常識」と「父親の厳しい愛情」というフレーズがあったんですね。「学生諸君に告ぐ」みたいな内容だったと思いますが……。試験問題は、そのフレーズを文化人類学的に考察せよということでした。私はこの問題を見て、どうしようかなあとかかなり考え込んだんですが、ああ、そうだ、「父親の厳しい愛情」のほうを選んで、『巨人の星』の星一徹と星飛雄馬の物語を書いたらいいんじゃないかと思いついて、なんだかんだと書きました。おかげで「優」で通りました。まわりの友人はみんな「良」だったので、アピールしたのかなと思ってはいるんですけども……。ただ、3000人ぐらいい登録者がいる授業でしたから、米山先生が3000枚の答案をどういうふう採点されたのか、そしてほんとうに私の

答案が印象に残ったのかは、いまだもって謎です。

そうやって、私は、京大の1回生、18歳から19歳の頃に、初めて文化人類学を知りました。その後、2回生になりました。その頃の京大では、専門の講義が始まるのは3回生からです。一方、教養部が必要な単位は、第1外国語、第2外国語に体育。それから人文科学、社会科学、自然科学からそれぞれ12単位ずつ。これらは通年科目で4単位でしたから、それぞれ3科目とるだけでよかったんです。だいたい、授業に出ていなくても試験をふつうに受ければ通るわけですから、少々いいかげんでも必要な単位は1回生のうちに揃えられてしまうのが、当時の京大教養部の状況でした。私も、1回生でだいたい単位は揃ったし、さて何を勉強しようかなと考えて、目についたのが、先ほど米山先生も話されていましたが、「文化人類学実習」という授業でした。履修要項には、大阪の天神祭の調査をするということが書かれていました。水曜日の午後の3コマ目と4コマ目を使った授業で、これはおもしろいのではないかと思います、私はその実習の授業を登録して、天神祭の調査に加わったのです。

文化人類学実習では、天神祭を調査する以前、祇園祭を調査していました。それが米山先生の手によって『祇園祭』という本になって、中公新書から1974年に出ていました。この本のサブタイトルは、「都市人類学ことはじめ」です。そして、私が入学した1977年から天神祭の調査が始まったんです。ですから、私は天神祭調査の2年目に参加したことになります。天神祭は、7月24日がクライマックス、船渡御ふなとぎよです。受講生それぞれがテーマを持って調査するというので、私が何を調べたかということ、大阪天満宮の巫女さんです。巫女さんにインタビューして、当時の自分としてはすごい量のレポートを書いて出した覚えがあります。そして、先ほど米山先生もおっしゃっていた「近衛ロンド」で、実習でやった調査の結果を報告するというのが毎年1回ありましたから、その年、1978年の秋には、私もロンドで巫女さんの話を

したはずです。この天神祭の調査については、その後、『天神祭』として、これも米山先生が中公新書から1979年に出されました。あとがきには、調査参加者として、私の名前もついています。

3回生になると、文学部では、それぞれの専攻に分かれます。私は、文化人類学という学問に心ひかれるところがあって、それを勉強したいというふうにだんだんと思い始めておりました。ただ、当時、京大には文化人類学の専攻がありませんでした。文化人類学実習に出ている学生には、文化人類学を専攻したいと考えているものはずいぶんいましたが、やはり、先ほどの話にもあったように、自分の学部の中で比較的近いものをとということで、農学部の学生でしたら農業経済学、理学部の学生でしたら人類進化論などに進みました。文学部では、社会学、地理学、考古学、言語学など。私は、いろいろ考えたんですけども、社会学に進むことになりました。当時はまだ、「文学部哲学科社会学専攻」でした。

米山先生も、所属は教養部の社会学教室でしたので、学内の非常勤ということで、当時は文学部の社会学の専門科目も受け持たれていました。「三都比較論」とかいうテーマだったと記憶しています。社会学で私の少し先輩には、文化人類学界の、もう若手じゃなくて中堅ですが、アフリカ研究の松田素二さんとか、栗本英世さんとかがおられて、そういった人たちは私は横目で見ながら社会学を勉強していました。そして、大学を卒業して、もう少し勉強したいなということで、大学院に進学し、松田さんや栗本さんともかなり親しくつきあうようになりました。

ただ、そうやってまあ文化人類学の近くにはいたわけですが、結果的には、私は、自分が文化人類学者であるとか、文化人類学を勉強している、専攻しているというふうにはならなかった。文化人類学にそこまで深くは関わらなかった。それはなぜかなあと考えてみると、京大にはアフリカ研究の伝統があり、それから、東南アジア研究センターもありましたが、そのへん

とけっきょく縁がなかったというところかなあと思います。米山先生の研究室に出入りしていた学生を中心に、アフリカ研究会というのもあった、それもおもしろいなあと思っていたんですけども、それほどすごくアフリカに行きたいわけでもなければ、東南アジアに行きたいわけでもない。あるいは、ただのへそ曲がりかやせがまん、意地を張っていただけなのかわからないんですけども……。それで、外国に行くより、国内でおもしろい研究をやりたいと考えて、大学院の修士課程のとき、1982年に、日本の大衆演劇の劇団に1年2ヵ月弟子入りをして舞台に立ちました。このときのフィールドワークが、今の私の研究の根っこにあります。

私自身は文化人類学を勉強しているという意識はなかったものの、学部から大学院にかけて、近衛ロンドにはよく出ていました。出入りが自由だったので、いろんな人が来ていました。今でいえばホームレスのような人も、数年間、毎回のようによく聞きに来ていたことがあります。80年代半ば頃のことだと思います。タッシンノブジさん。名前だけは覚えているんですが、漢字でどう書くのかわかりません。出席者は毎回記帳するんですが、そこに書いてある字が判読できないんです。タツは「竜」のような字でした。タッシンさんによれば、なんか、とにかくプロジェクトがあるらしい。近いうちに私たちのプロジェクトがある、プロジェクトがあるとよくおっしゃっていましたが、最後までどういうプロジェクトなのか教えてもらえませんでした。タッシンさんにそのプロジェクトについてロンドで話してもらうようお願いしたところ、次回から姿が見えなくなったのではなかったかと……。そのへんはよく覚えていません。

それから、私が大学院生だったころ、近衛ロンドは通算700回ぐらい続いていて、777回目には私が話をするとあって、何かの話をしまして、その後「フィーバーだ」とか言って、当時はやっていたディスコに行くという、しょうもないこともやりました。何の話をしたかは、全



く覚えていません。あるいは、近衛ロンドの名前で毎週水曜日の夜、楽友会館で借りている隣の部屋を、「近衛ドロン」という名前で借りて、借りるだけで使わない。つまり、同じ日の同じ時間によく似た名前の団体が隣の部屋を借りているんだけど、人がいっこうに現れない。空っぽで、ドロンする。そういうことをしたらおもしろいんじゃないかという話で盛り上がったとかですね。そういう、しょうもないことをやってばかりで、知的なサロンとはほど遠いような、大学院生時代でした。お恥ずかしい話です。

そういう意味では、私は、文化人類学の専門教育も受けず、我流でフィールドワークをやってきた者です。そして、京都はけっきょく私が文化人類学を選ばなかった町でもあるのです。けれども、先ほどの先生方のお話を聞くと、私は、ひょっとしたら、もっとも京大らしい育ち方をした最後の世代であるのかもしれないなというふうにも思います。私が大学に入ったのが、米山先生がおっしゃっていたように、ちょうど民博ができ、京大から人類学者がいなくなった時代です。そして、大学院生の頃は、まだ民博にドクターのコースができる前でした。だから、文化人類学の専門教育を受けたくても、受ける場所が全然なかったわけです。そういうええかげんなものでしたので、大学院を出た後もなかなか定職につけず、80年代後半から90年代半ばにかけて、京都を根城として文化人類学の周辺をふらふらしていたというのが、私の30代半ばぐらいまでのことでした。

その後、思いがけないことに、1996年、京都文教大学の開学時に、私は文化人類学科のメンバーの1人として加わることになりました。日本で唯一の文化人類学科です。つまり、京都は私が文化人類学の教育にたずさわることになった町でもあります。

ただ、私は京都文教大学では微妙なポジションなんです。文化人類学科のスタッフは、文化人類学の専門教育を受けた文化人類学者がほとんどなわけですね。そこに私は、文化人類学の周辺をふらふらしていても、文化人類学者ではな

くて、社会学者として、社会学の講義をする人間として加わったわけです。普通は、これが逆ですよ。社会学部や社会学科はたくさんあります。そこでは、社会学科の中に文化人類学者が1人というのが、普通です。私はそれと全く逆の立場で、社会学者だけれども、たった1人。非常にマイナーな、不思議なポジションにいるわけです。

また、私のような育ち方をしてきた人、京都で、近衛ロンドや文化人類学の周辺にいた人というのも、現在の文化人類学科のスタッフには少ない。私と同年なんですから、エチオピアを研究している松田凡<sup>ひろし</sup>さんだけです。近衛ロンドに出入りしていたメンバーは。だから、松田さんとは、ほんとに長いつきあいだなあと、あらためて思います。

とにかく、私は、思いがけず京都文教大学の文化人類学科のスタッフとなったわけです。私は社会学者ですが……、社会学者のつもりではあるんですが、先ほど田中先生がおっしゃった「フィールドワーク実習」という科目を担当しなければならなくなりました。フィールドワーク実習は、調査地選びから、実際に調査をして、口頭発表し、報告書を書き上げるということまでを、1年を通じて指導する科目です。それを担当しなければならない。これは、学生にとって必修科目です。担当する教員にとっても、かなりハードな授業です。今年、やっとそれをローテーションで1年間休めることになったんですけれども、昨年まで5年続けてずっと担当しました。

つまり、私は京都文教大学に来て、フィールドワークを「する」側から「教える」側になったんですね。この経験を生かして、何かできないかなあということ、最後の「京都でフィールドワーク」という話になります。

これは実は、話が逆になってまして、フィールドワーク実習という授業から「京都でフィールドワーク」となったのではないんです。もともとは、1999年から2001年にかけて、京都文教大学の人間学研究所の共同研究会として、「京都論—その多文化的側面から」という研究会が

| いとなみ<br>方法論 | 働 く       | 住 む       | 着 る       | 味わう       | 見せる      | 見 る | 遊 ぶ       | 買 う | 売 る       | 集まる      | つくる       |
|-------------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----|-----------|-----|-----------|----------|-----------|
| あるく         | 鵜飼<br>10  |           |           |           | 森<br>20  |     | 日野<br>32  |     |           |          | 中村<br>41  |
| み る         |           |           |           |           | 遠藤<br>68 |     | 日野<br>58  |     |           | 豊田<br>78 |           |
| き く         | 西川<br>137 | 金<br>98   |           | 竹内<br>109 |          |     |           |     | 鶴見<br>118 |          | 竹口<br>127 |
| よ む         |           | 高石<br>186 | 杉本<br>156 |           |          |     | 平岡<br>166 |     |           |          | 石川<br>175 |

図1 フィールドワークの方法 京都論（名前は執筆者を、数字は当該書の掲載頁を示す）  
鵜飼正樹・高石浩一・西川祐子『京都フィールドワークのススメ』昭和堂、2003、P3

持たれたことがきっかけです。これは、先ほど日野先生もおっしゃったように、文化人類学科と臨床心理学科という2つの学科の特性を生かした共同研究をするということと、京都文教大学が京都というまちに立地しているということ、この2つのことから作られた研究会でした。この研究会を3年間続けた成果として、何らかのアウトプットを考えたいという話の中で、私が出したアイデアが、「京都でフィールドワーク」ということです。

どういうことかと申しますと、京都論の研究会の成果をフィールドワークと結び付けて、フィールドワークのテキストを作れないかというアイデアです。最近もそういうタイトルの本が出ましたが、京都についての本は、「京都人だけが知っている京都」を紹介するというような書き方ばかりです。よそさんは知らはらへんけど、私だけは知ってまっせと。京都には奥があって、表面に見えているだけではわからない。もっと奥にいかなきゃ味わえない。それは、京都で生まれ育った人やないとわかりまへん。こうした書かれ方ばかりしているわけで、そういう本の逆をいったらどうかと。つまり、よそ者として京都を見る。よそ者の視点。そういう、逆転の発想はどうかということなんです。

考えてみたら、文化人類学はよそ者の学問なんです。つまり、どこに調査に行くにしても、そこに入る時は必ず、その人間ではなくよそ者として入るわけですね。そして、いくら長

期間フィールドワークをして馴染んでも、その人間になれるわけでもない。最後はけっきょくよそ者として去らなければならない。私自身がフィールドワークをした大衆演劇でもそうです。日本ですから、肌も同じ色です。言葉も同じです。それでも、私はけっきょくよそ者です。ましてや、肌の色や言葉が違えば、どれほど親しくなっても、よそ者でしかない。

これは、臨床心理学についても言えることです。臨床心理学でフィールドワークにあたるものは、カウンセリングですね。カウンセリングでは、クライアントさんの話を聞く。そこでは、クライアントさんに沿う、クライアントさんの話ののっていき、そういうことをするけれども、いつかはやはりクライアントさんはよそ者として離れていく。臨床心理学は、そういうことを、いわば学問の宿命としているものじゃないかと。

そういう意味では、臨床心理学者も文化人類学者も、プロのよそ者なんだと。文化人類学者も臨床心理学者も、よそ者のプロフェッショナルなんだと。そういう、よそ者をポジティブにとらえる視点で、京都文教大学という大学の特色を生かした京都論の研究会の成果をまとめてられるんじゃないかと考えました。

それからもうひとつ、「京都で」フィールドワーク、これもポイントです。このシンポジウムのテーマは「京都と文化人類学」となっていますね。それから、「京都の文化人類学」とか「京都をフィールドワークする」というのもあ

と思うんですけれども、「京都で」というのがミソです。それは、悪く言えば、京都はダシやということです。つまり、必ずしも京都である必要はなくて、「大阪で」でもいいし、「東京で」でもいい。たまたま私たちの大学が京都にあったから京都であるだけで、そういう、偶然の出会いみたいなものを前面に出すことで、おもしろいものができるのではないかと考えました。

そういう中で思いついたのが、「フィールドワークの方法・京都論」です（図1）。これは、仮に「京都論マトリックス」と呼んでいるものなんですけれども、ひとつの仕掛けとして、京都をフィールドワークする網目みたいなものを考えてみたということですね。縦のマス目を見ると、「あるく」「みる」「きく」「よむ」。これは、方法論というとなんか難しく聞こえるかもしれませんが、物事を考えていくさいの糸口みたいなものです。横のマス目は人々のいとなみで、「働く」「住む」「着る」、などなど。これは、京都でさまざまな人々がやっている具体的ないとなみですね。京都で働いている人もいれば、住んでいる人もいます。京都は着倒れといわれるように着る、あるいは京都の食べ物を味わう、こういういとなみも考えられる。この、縦のマス目と横のマス目をクロスさせたところで、フィールドワークを展開していくと考えるとどうだろうということ。たとえば、この図では「鵜飼」と記入されていますが、「あるく×働く」というところ。これは、「働く」ということを「あるく」という視点から考えてみたら、どんなフィールドワークができるんだろうか、そして、どんなことが言えるんだろうか。そういうことを、私の書いた章では考えてみたということ。す。

この本は、『京都フィールドワークのススメ』というタイトルで、今年（2003年）の3月、3月末ギリギリなんですけれども、本屋さんの店頭で並べることができました。実際に手に取っていただけたらさいわいです。ちょっと売り口上を述べますと、表紙もおもしろいです。これを描いてくれたのは、「モッサイ社」さん

とあって、非常におもしろいイラストを描く人で、私が京都の町で見つけました。京都駅の宝くじ売り場の看板なんかを描いている人です。この人に、「もう一人のフィールドワーカーとして絵を描いて下さい」と、依頼しました。本の表紙を描くのは初めてということでした。このイラスト、細かく見るとすごいおもしろい。窓から覗く人がいたり、スクーターにお坊さんが乗っていたり、ハンバーガーショップの看板が茶色になっていたりとか……。細かく見ると非常におもしろいですから、ぜひ手に取ってご覧になってください。

さて、いよいよ話をしめくりたいと思います。先ほど申しましたように、私は、京都大学に文化人類学の専攻がない時代に、文化人類学の周辺で色々やってきたという世代のおそらく、いちばん最後あたりになるのじゃないかと思っています。

先ほど米山先生が配られた『季刊人類学』の目次の終わりの方を見ていただくと、私の名前が出てきます。1988年の19巻3号。最終巻のひとつ前です。「大衆演劇はいかに演じられたか—大衆演劇におけるパフォーマンスと型について」という論文です。『季刊人類学』について、ひとつだけ私が補足しておきたいことは、原稿料が出る雑誌だったということです。400字詰め原稿用紙1枚で1000円出ました。これは、院生やオーバードクターにとって非常にありがたかった。原稿料をかせぐためにたくさん書いたので、私のこの論文の抜き刷りはかなり分厚かったです。しかも、写真や図も、学術雑誌には掲載料を取られるものもあったけれど、『季刊人類学』はいらない。とにかく、自分としても、全力を注ぎ込んで書いた論文です。それから、最後の巻である20巻1号では、「ばろーん」というコラムで「見世物小屋のじゃぱゆきさん」という、これは短いものなんですけれども、書きました。

このように、文化人類学の専門教育を受けていない、体系的に文化人類学を学んでいない、しかし、京大の文化人類学の知的な伝統に多少なりともつらなる最後の世代が、おそらく私ぐ

らいじゃないかなあとと思います。まあ、さっきから、全然知的とはいえないようなことばかり話していますけれど……。米山先生が京大を退官される直前に、京大教養部は改組されて総合人間学部になり、国際文化学科と大学院（人間・環境学研究科）ができて、スタッフも揃い、文化人類学を本格的に勉強できるようになりましたが、私は残念ながらそれにはもう間に合わなかったわけです。

そういう、制度化される以前の京大の人類学を知っている最後の世代である私が、京都文教大学の文化人類学科という、日本で唯一の文化人類学を専門に教える学科のスタートの時に居合せたというのは、めぐり合わせというか、田中先生のお言葉を借りれば出会いの妙というか、まさにそうだなと感じております。最初は、私のような若輩者が最後にお話するのは僭越だし、おさまりが悪いと、ずいぶん恐縮していたんですけども、案外、ここで私が最後に話すのはふさわしいかもしれない、などというところまで聞かれますけれども、それも悪くはないのではないかもしれないと、あらためて思いました。これで私の話を終わりにさせていただきます。

### 特別シンポジウム・質疑応答

日野：

どなたに対しても結構です。お話になる時はマイクを用意しますので、お名前、もし所属があれば所属を最初に言って下さって、質問して頂きたいと思います。どうぞ挙手をなさって下さい。ありませんか。はい、どうぞ。

質問者1：

ものづくり大学の土居と申します。非常に興味深い話をありがとうございました。ただ、今日の話、京都文教大学までの来歴はよくわかったのですが、未来があまり見えなかったように感じました。特に、最後の鶴飼さんで、「私が最後の」というようなところがかなり強調されておられたので、できますれば先生方に一言ず

つ、未来について語って頂きたいと思います。

日野：

はい、田中さんどうぞ。

田中：

私は、日本という国がこれからの新しい時代に生きていくためには、文化人類学に未来がなければ日本はおしまいじゃないかというくらいに思っております。日本人っていうのはかなり独りよがり、特に今は自閉症的になっていて、異質な外部とのコミュニケーションや自己主張が出来ない。そういう生き方ではなしに、異質な文化の人々ともコミュニケーションし、情報を自分の方からも発信出来るような、そういう人間をつくっていかねばならない。そのためには文化人類学は重要だと思っております。

日野：

鶴飼さんはどうでしょうか。

鶴飼：

そうですね。私は、文化人類学という学問の未来ということよりも、京都文教大学文化人類学科の話をしたと思います。私も担当しておりますが、フィールドワーク実習という授業は、先ほどもいいましたが、非常にしんどい。必修ですから、教員も、出来が悪いからといって簡単に学生を落とすわけにはいかない。単位を取らないと卒業できないわけですから。これは、教員にとってもかなりのプレッシャーです。文章が書けない学生でも、辛抱強く指導し、なんとか人に読んでもらえるレベルの報告書に仕上げ、調査地のみなさんにお渡ししなければなりません。学生とは、何度も何度も原稿をやりとりします。そうやって、少しずつ、少しずつ、考察が深まり、文章もよくなっていく。毎年、春休みに入っても報告書の添削に追われます。けれども、このフィールドワーク実習は、教員としてもやりがいがあるんです。それがすなわち、京都文教大学文化人類学科の未来な

んじゃないかというふうに、私は思います。

**日野：**

私からも一言。実は世間では、文化人類学というような学問は一応名前は知っているという程度で、ほとんど内容は知られておりません。そして、特に文化人類学を勉強して何になるのかというようなことを、親御さんや高校の先生方がやっぱり心配されます。これは親としては当然、それから高校で教育をした先生としては当然なことなんだと思いますが、この数年、ちょっとしばらくは落ちてきた受験者の数が少し増えてきました。それを見ますと、例えば、「自分でインターネットを見ていたら、文化人類学科って京都のここしかないのよ」、というようなことで、ほとんど私達が名前を知らない北海道の高校とか、沖縄の高校とかからひょいと受けに来る、というような人たちが、ほとんど全国区で多くなってきているようなことがあります。

それが1つと、それから、AO入試というシステムを作りました。つまり自分でエントリーして受けに来い、という。そして色々、我々と話し合いまして、そしてそこで宿題を出して、その宿題について色々やるというようなそういう試みも始めました。まだ8年目ですがこれからどうなるかということとはちょっとわかりませんが、そういうかたちで、少なくとも親御さん、高校の先生よりも、実際に勉強しようという若い人達の中からこの大学を受けてみようというような人が少しずつ出てきています。未来というようなことで言いますと、さっきの田中さん、鶴飼さんが言われたようなことも含めて、なんとかやるのではないかと、というように考えております。ほか、何かございますか。はい、よろしく。

**質問者2：**

6~7年ぐらい前に退職しまして、自宅で勉強させて頂いております、今井と申します。石毛館長にお伺い致します。いいお話を頂きまして、ありがとうございました。

館長のお話では、関西ですでに、京都を中心に人類学の研究や霊長類の研究が進んでいて、その系統から博物館が関西に来たようにお伺いしましたが、この大阪に万国博を誘致し、跡地に民博ができました理由の辺りで、研究者の先生方のご判断の中に、この関西はどれも狩猟文化についての文化財が乏しいと。関東は狩猟文化についての文化財がやはり中心になって、こっちのほうが古代から中世についてのアジア、中国文化の文化財がいっぱいあると。それで日本の歴史文化財となりますと、やはり関西に集中しておりますね。そういうことから、どこかの時点でそういう国家の文化政策的な配慮はなかったのかどうか。文部省なり、文化庁なりの国家の文化政策への配慮が働いて、万博跡地にこういう大きな施設が出来たのではないかと、という感じを普段から持っております。先生のお話にはそのことは出て参りませんでした。それは結果であって、全くそういうのがなかったのかどうか。一言先生のお話を…

**石毛：**

はい。おっしゃるように、関西は歴史的な文化財がたいへんおおい。それにたいし明治以来の首都圏には、政治の中心地としての国際化が進んだことによる遺産がおおいともかんがえられます。ただし民衆レベルで海外の文化と付き合いということに関しては、中国や朝鮮半島の人びとがおおく住み、商社の貿易をつうじて東南アジアとの交流がさかんだ関西の方がアジアとの付き合いでは親密だったと思います。

ところで、国立歴史民俗博物館が千葉県の佐倉にあり、民博が関西にある。そのところで、国際的なものがおおい東京じゃなくて関西に民博を設けることによって、関西をもっと国際的にし、あるいは異文化について啓蒙しよう、といったような政策的な意図は、実はなかったんですね。

国立の機関というのは、東京あるいは東京周辺にあるのが当たり前であるという、一種の常識論が世間では通用しています。ですから、歴

博の場合でもそういった考え方で東京近郊に設立されたのでしょう。民博の場合も、さきほどちょっとお話しましたように東京周辺に場所を探したこともあったのです。それはまあ、70年万博の跡地という出物があり、しかも70年万博に仮面と神像を収集したオーガナイザーの一人であった梅棹さんがたまたま跡地利用委員会の委員であったという事情があって現在の場所に設立されたのです。そのとき意図的に関西の国際文化理解を深めるために大阪府にもってきたというわけではなかったようです。現在でも、国立機関というのは首都のそばにあるべきだという常識論が幅をきかせて、「なぜ民博は東京にないんですか」といわれることがよくあります。

日野：

はい、その他ございますか。はい、どうぞ。

星野命：

私は3年ほど前から京都文教大学の人間学研究所の客員研究員ということにして頂いております、星野でございます。実は自宅は石川県金沢にありまして、今日楽しみにして参りました。と申しますのは、先ほどからお話に出ております京都大学人文科学研究所、それから近衛ロンド、今からもう30年前になりますね。1970年代に私、文部省の内地留学の制度を使って1年間だけ人文科学研究所の西洋部におりました。その時に梅棹忠夫先生、それから先ほどお名前が出ました藤岡喜愛先生、そして今日ここにおられる石毛先生も、まだ若手のバリバリのフィールドワーカーとして、出入りしておられました。懐かしく思い出します。先ほどこの、『季刊人類学』の通巻総目次を見ておりましたら、5ヶ所に私の名前が出てきたんで、何やら恥ずかしいような嬉しいような気持ちでございます。2巻3号に「あくたいもくたい考」という論文を書かせて頂きまして、その後、コメントとか有馬さんと面接をした時の記事とか「ぱろーる」、それから座談会で祖父江孝男さんなどと一緒に話し合いをしたことを今懐かしく

思い出しております。

私は母親が京都亀岡の出身だったということもありまして、京都にとってもひかれておって、1年間来ただけでも、ずいぶん東京、横浜辺りで住んでいた時と気分が変わりました。特に人文科学研究所の研究会で、私はがーんと一度頭を殴られたような思いをしたことがございます。それは、研究会で私が色々質問をしますと、発題した方からすぐにはお答えを頂けない。「なぜお答えを頂けないか」とも、私は聞いたんですけれども、決して直接にはお答えにならない。藤岡先生に後で聞いたら、「君、それは無理だよ」と。「あの中の人達に聞いたら、君こう言われるよ。『京都の学問なり、京都のことを知ろうと思ったら、住んでみなはれ』と」。東京からよそ者がですね、ひょこっとやって来て、京都のことや、あるいは京都のいわゆる伝統的な、京都の学問の香りと言いますかね、そういうものを知ろうというのは無理だよ、と言われました。それからもう1つ、東京では知識は右の耳から入って左へ抜けてくと。ヨーロッパ・アメリカ、その他の西洋の学問については本を読んで色々と勉強しとるかもしれんけども、足がきっちり地に着いてないと。つまり、フィールドワークをやってないってことをよく言われました。私はそれを思いますと、こういう文化人類学の大学が京都の地に出来たということは、実に適切であると思います。

それから今日の石毛さんや米山さんのお話は、人物で語る文化人類学の歴史を伺わせて頂いたような気がします。普通はこういう場合は、シンポジウムというとすぐ学問的成果が問題になりますけど、今日はもう数え切れないくらいの人々の名前が出ました。こういうことはですね、心理学などの学会ではもう稀にしかないことなんです。つまり人によって出来、人が理解し、人に付き合うという、そういう人類学の心意気が貫かれてるなという感じがしたんですが。もし京都文教大学の未来があるとすれば、それはやはり、「人間になる」とこと、「人間をつくる」というのはおかしいかもしれません

けれども、「人間を育てる」ことと、そしてどこへ行っても人間であることが誇れる、そういう学問をここで多くの若い人が学んでいくんだろうと思います。ありがとうございます。

日野：

はい、貴重なお話、ありがとうございます。我々にとっても励みになるいいサジェスチョンを頂きましたことをお礼申し上げます。はい、それじゃもう一人、どうぞ。

質問者3：

村田と申します。石毛先生の方からお話ありがとうございました。石毛先生は民博の館長をしておいでだったということで、私も民博の方へ3回ほど講演を聞きに行ったり、あるいはまた1日向こうですっと中を見ているというようなことで、非常にいい所なんです。京都からいたしますと、足の便利が非常に具合悪いですね。最近特に講演会といいますと時局の講演会、あるいは政治経済のシンポジウムは多いんですけども、文化人類学のシンポジウムというのはあまりないと思います。それは非常にいいことだと思うんです。それで文教大学の先生、あるいはまた京大の先生も、そしてまた民博の先生も含めてですね、出来ることならば、この頃流行りの出前といいますか、出前講演というものを定期的にやって頂きたいなあとと思うんです。そういうことによって文化人類学というものがますます一般の人達に認知されてくるんだと思うんですけど、そういう点はどのようなご計画をお立てでしょうか。ひとつ教えて頂きたいと思います。

石毛：

おっしゃるように、民博は京都からだけではなくて、大阪の都心からも足の便が悪いところです。そしてまたですね、公園の中にあるので、環境はたいへんいいけれども、公園の中には公共交通機関が乗り入れないんです。わたくしはずいぶん努力をしまして、何とかバスを民博の前に乗り入れてもらう運動をしました。わた

くしの在職中には実現しませんでした。将来はバスで博物館の前まで来られるようになるだろうと思います。

わたくしは博物館に人びとが来ていただくのを待っているだけではないと思います。むしろ、われわれの方から外へ打って出ることがたいせつだと思います。そこで、わたくしが館長になってから、博物館の出前をはじめました。移動博物館というプランをつくり、全国のさまざまな地方に民博の収蔵品をもっていき展示することをおこないました。

みんぱくゼミナールという市民講座を、毎月民博の講堂でやっておりますし、博物館友の会のゼミナールもおこなっています。また、巡回ゼミナールと称して、地方新聞社と組んで、例えば青森、福島、鹿児島、那覇など、さまざまな地方で講演会を開催しています。

大阪の梅田に阪急HEPという劇場がございます。そこで、3～4年前から、2ヵ月に1ぺんぐらい、民博の研究者たちが中心になって、楽しい市民講座をやっています。最初の年は、吉本興業と組みまして、漫才のハイヒール・リングさんが司会役で、民博の研究者たちが、自分の研究をわかりやすく紹介するというのをやった。今年は民族音楽や民族芸能を中心としたシリーズを企画し、音楽の生演奏などもある市民講座をしています。新聞の催し物の欄のところに注意してご覧いただいたら案内が出ていますので、お越しいただきたいと思います。

いずれにしろ、これからの博物館活動というのは、お客さんが来るのを待っているんじゃなくて、積極的に博物館の側が社会に打って出ることが大事だろうと思っています。

日野：

ありがとうございます。京都文教大学はまだ小さな大学でなかなか大変なんです。今年から高校とかを対象に出前で講義をするというようなことを始めてます。またこの人間学研究所の公開講演会は今までだいたい私の大学でやってましたけれども、この機会をあれしまして、ご忠告も活かしまして、また京都の便利な

とこでやるというようなことも考えたいと思います。今日はどうもありがとうございました。時間がちょっとオーバーしてしましまして、一応ここは9時まで借りておりますので、これでお開きにしたいと思います。先ほど鶴飼さんが話された京都論の本は表で売っておりますので、興味のある方はお買い求め下さい。どうもありがとうございました。

(了)